

子供の声

双葉町への引越し初日の朝、大量の取材を受けた。福島民報、福島民友、河北新報といった地元紙すべて、全国紙も2社ほど、テレビもNHKや地元テレビ局だけでなく、中国とドイツからも依頼があった。ウェブメディアもいくつか来ていた。

取材はありがたかったが、朝から晩まで同じ質問を何度も受けて疲れていた。そんな中、こんな問い合わせもあった。

「谷さん、お引越しおめでとうございます。マルバツ新聞のオザキです。今日の夕方はご在宅でしょうか？」

「取材ですか？」

「ああいえ、取材はまた後日、改めて正式に。今日はご挨拶だけでも伺えれば！」

「ご挨拶だなんて、そんな、結構ですよ」

「いえいえ、ご迷惑でなければ行かせて下さい。ご近所ですし！ どうでしょう？」

ぶっちゃけると迷惑だったが、迷惑だなんて言えるわけない。苦笑いしつつ申し出を受け入れた。オザキさん、なかなか押しが強い。多分、サッカー部かバスケット部だったんだろう。そして夕方、オザキさんから再度連絡があった。

「谷さん、間もなく到着します！ ちょっと今日、急遽子供を見てないといけなくて、お邪魔でなければうちの息子も連れて行こうと思うんですが。どうでしょう？」

ぶっちゃけると邪魔だったが、邪魔だなんて言えるわけない。ぜひ来て下さいと迎え入れた。オザキさん、やはり推しが強い。きつとパリピなんだろう。そしてオザキさんは息子を連れて到着した。6歳の息子・タカシくん(仮名)は偶然にも同い年だったうちの息子・オウタと意気投合し、家の前を所狭しと駆け回り始めた。

「行くぞー！」

「捕まえてみろー！」

「負けるかー！」

「こっちの方が早いぞー！」

「キャー！」

「アハハハー！」

「うんこー！」

そんな子供らの鬼ごっこにオザキさんが加わった。サッカー部でパリピの大人の乱入に、子供たちは大喜びだ。

「行くぞ、ウオー！」

「キャー！」

「待て待て、ガオー！」

「逃げろー！」

「捕まえたぞー！」

「バリアー！」「うんこバリアー！」

「ギャー、やられたー！」

「キャー、逃げろー！」

「待て待てー！」

日が傾き、空はもう真っ赤だ。息を切らしたオザキさんが子供たちから離れ、僕の隣へ来た。「子供ってのは本当に元気なもんですね」と僕が言う。「本当にね」とオザキさんが返す。「子供を見てな」といけなくなって、つて言っていました。奥さんお仕事か何かですか」と僕が尋ねる。「いえ妻は、実は病気で亡くなりました」とオザキさんが返す。僕は慌てて謝る。オザキさんは「構いせんよ」とかす。子供らはそんなことお構いなしに追いかけて続いている。しかし僕とオザキさんの間に流れる空気はもう少し、確実に変わってしまった。それを察してオザキさんが静かに話し始める。

……僕たち以外、本当に誰もいませんね。それでもこうして、今日からはここに、人が住んでいる……っていうのは、すごいなあと思いますよ。感動します。……僕もこの辺りに引越して、取材をして長いですが、まさかここで子供らの遊ぶ声が聞こえるなんて、思いもよらなかつた。……見て下さい、あいつら（笑う）。子供ってのは早いです、もう友達だ。タカシも良かったなあ、同い年の友達ができて。

……谷さん、もしかしたらこれ、本当に、11年半ぶりかもしれないよ。僕たちだけじゃなくて、11年半ぶりにこの町は、子供の遊ぶ声を聞いたのかもしれない。あんなに元気な……。

耳を澄ますと、元気の全く衰えない子供たちの声が聞こえてくる。

「うんこー！」

「うんこバリアー！」

「うんこうんこうんこー！」

「キャハハハー！」

これがこの町が、11年半ぶりに聞いた子供たちの遊ぶ声だ。

「うんこうんこうんこー！」

「キャハハハー！」